



イラスト・すみのけいし

「芸者さんとお座敷遊び」、なんともくすぐられる言葉ではありませんか。しかし、悲しいかな、経験はほとんどございません。まあ、お金持ちの知り合いに連れて行ってもらうしか縁がないのですから、いたしかたないことです。それでも京都と金沢で行ったことはあるのですが、地元・大阪には、そのようなものはや存在しないと思っておりました。

大阪の生き字引、この連載の第一回対談相手の高島幸次先生によりますと、かつては大阪の花街もたいそう賑わっていたそうです。その高島先生にご紹介いただいたのが、今回の対談相手、大阪は北新地、元芸妓で名妓と噂された西川梅十三さんです。

それまでも何度かお目にかかったことがあったのですが、対談の一カ月前ほど前、梅十三さんのお世話で「最初で最後の芸者さん遊び@大阪」というのを催し、十数人でお座敷遊びをさせてもらう機会がありました。そして、古き良き時代の大阪の「お座敷文化」を堪能でき、一同大感激したのであります。

ちなみに、その一同には、高島先生と、第二回対談相手の国語学者・金水敏先生も含まれておりまして、どんだけ半径のせまい連載対談なんでしょう……。

なかの・とおる●1957年大阪府生まれ。専門は生命機能研究など。著書に『エビジェネティクス 新しい生命像をえがく』（岩波新書）など。

それはさておき、今回は、大阪の花街が賑やかだったころのお話をあれやこれやとおうかがいしました。梅十三さんのきれいで上品な話し言葉がうまく伝わったら、とってもうれいんですけど。

大阪花柳界事情

仲野 大阪の花街といったら、梅十三さんがおられた北新地、それから、堀江、新町、南（南地）の四つだと思っんですが、芸妓さんっていま、全部でどれくらいおられるものなんですか？

梅十三 新町、堀江は、誰もいてはらしまへん。北の新地と南を合わせて十人くらいでんな。北の新地のことは、以前、講演先の方がいろいろ調べてくださった。「古き北新地を語る」という資料に詳しく書いてあります。

編集部 「堂島新地の誕生↓曾根崎新地の誕生↓消滅による一本化↓高度成長期にお茶屋の街からバー・クラブの街へ変身」とありますね。

仲野 蛭川って、近松の『曾根崎心中』や『心中天網島』の文楽に出てくる、心中の似合う川ですね。

編集部 その蛭川が消滅、というのは？

仲野 確か、火事で埋め立てられたんですね。

梅十三 北の新地は三べんくらい、火事におうとりますねん。天満火事、いいますねん。そのときには、空（く）心（しん）町（ちょう）ゆうて、いまの帝国ホテルのあるあたりから桜橋（さくらばし）のほうまで、ずっと燃えて。

仲野 明治の終わりくらいにあった、キタの大火のことですね。それにしても、帝国ホテルから桜橋までといったら、直線距離にして二、三キロはあると思えます。ずいぶん焼けたんですね。

編集部 それをきっかけに曾根崎新地と堂島新地の二つの遊興地が一本化され、いわゆる北新地が誕生したという感じでしょうか。さらに高度成長期にはお茶屋の街からバー・クラブの街へと姿を変えていったと。

仲野 梅十三さんは、いつからお座敷に上がってはいったんですか？

梅十三 昭和二十八年から。

仲野 おいくつのおときから……って聞いたら、歳わかっつてしまいますけど。

梅十三 ホントは十六。それを少し、ごまかして。当時は、いちおう十八歳じゃないと、お座敷に出られない

にしかわ・うめとみ●16歳から大阪・北新地でお座敷に上がる。大阪の花街の全盛期、名妓として活躍。